

第 96 回公開シンポジウム

## 子どもたちが学び育つ環境～教育詩学・歴史人類学～

◆ プレゼンター      鈴木 晶子  
京都大学大学院教育学研究科教授／  
日本学術会議連携会員・京都市教育委員

◆ パネリスト      野中 哲士  
神戸大学大学院人間発達環境学研究科准教授／認知科学・生態心理学

◆ 司 会      一色 伸夫  
甲南女子大学総合子ども学科教授／子どもメディア学

一色：第 96 回子ども学公開シンポジウムを始めます。本日のテーマは「子どもたちが学び育つ環境～教育詩学・歴史人類学～」というテーマです。非常に難しそうですが、解りやすくお話していただきます。趣旨としては、子どもが学び育つ環境とは、教師自身も学び育つ環境でもあります。だから、皆さん方も同じです。言葉はもちろん、表情や身振りなど様々なメッセージを受け容れていくような「力に満ちた場」を創出するには、視覚中心の現代で失われつつある触覚や聴覚、身体感覚を取り戻す必要があります。その手だてについて一緒に考えてみたいと思います。まず、お二人の先生方を紹介いたします。

鈴木晶子先生は、京都大学大学院教育学研究科副研究科長、教授、ドイツベルリン自由大学の客員教授もされています。ご専門は教育哲学、思想史、歴史人類学などです。主なご著書に『判断力養成論研究序説—教育的タクトを軸に』や『これは教育学ではない—教育詩学探求』などがございます。

それを聞くと難しそうだなどと思う人もいますが、鈴木先生は、教育や子育てをテーマに様々な場でいろいろなお話をされています。その中で、先生も保護者も異なる角度から関わっているものの、それぞれが担う役割の中で思い悩むことは一つ、子どもたちが学び育っていく環境を大人はどうすればよりよいものにできるのかというのを常々おっしゃっている先生です。先生のご専門は教育哲学という昔からの学問です。その中の教育詩学と歴史人類学をお話していただきます。そういう意味できちんと話を聞いてください。

もう、お一人、パネリストとして野中哲士先生です。野中先生は、神戸大学大学院人間発達環境学研究科准教授、フランス国立社会科学高等研究院 (EHESS) 客員教授もされ、日本生態心理学会理事、編集委員をされています。ご専門は生態心理学、認知科学、共著書に「知の生態学的展開」それから「知性の創発と起源」「アフォーダンスの視点から乳幼児の育ちを考察」というものがございます。それでは、早速鈴木先生にお話をいただきます。

**鈴木：**ただいまご紹介いただきました鈴木晶子と申します。今日はどうぞよろしく願いいたします。

まず、子ども学という学問を研究していると伺いました。冒頭皆さんに伺いたいのですが、私はもう子どもではなくて大人だと思う人は手を挙げてください。(4, 5名の手が挙がる) 意外と少ないですね。では、私はまだ子どもですという方は手を挙げてください。(10名から12名の手が挙がる)

法律上は20歳になったら大人と言われていますが、子どもと言ったときにどうやら私たちは、ある法律や制度といったもので、子どもか大人かということを区別しています。しかしよく考えてみると子どもというのは、大人が思うほどには子どもではないのです。皆さんにはこれから学校、幼稚園の現場に出られて、そして、自分より年下の人たちと関わっていくという未来が待っています。その時に皆さんどうしても「私はもう教師の立場だから」といってその現場にいる自分より年下の人たちを子どもだというように思って接することになるかもしれません。私たちは、教師というプロフェッショナルな立場になった途端、子どもというものを所謂世間で言われている自分が理解するところの「子ども」という捉え方でくくってしまう危険を冒してしまいがちです。

保育の現場に30年ほどおられ、園長も長くつとめたという方にお話を伺う機会がありました。私は人類学という手法でいろいろな方に聞き取りをしたり現場に入ったりしています。その方に、「30年間保育の現場にいて、何が一番分かったことですか」とお尋ねしました。すると、「子どもは自分に関わっている大人がどの程度の大人なのかということをきちんと見極める眼もっている。私たち教育者は子どもも一人の一人前の人間と思って扱わないといけない」とおっしゃっていました。これは小学校が中学校、あるいは大学の教育現場でも同じではないでしょうか。さらに医療の現場もそうです。お医者様は患者と関わっている時に、患者が自分をどう見ているかということにあまり意識がいかない。同じように保育や学校の現場に行った時に、自分がどう子どもたち、生徒たちから見られているかということには、教師はあまり目が行かなくなりがちです。子どもたちが言葉でははっきり言わなくても、「この先生は何かいかにも生徒のことを思いやって叱っているようにみえるけれども、実は自分の感情で怒っているのではないか」「一見、自分のことを考えてくれているような顔をしているけれども、自分のことしか考えていないのではないか」、或いは、「先生は自分のことを心配しているふりをしているけれども、どうも自分が一番大切なのだな」と、子どもは教師の状態を見極めながら教師と接しているのです。子どもの目は怖いのです。30年間ずっと現場にいた先生が、「年数が経てば経つほど、この子どもの目というものに気がつくようになってきたと同時に、この子どもたちの目に自分は育てられてきたのだと思います」とおっしゃっておられたのが印象的でした。親としての成長も同様です。子どもが生まれ、母親や父親になることによって、人間は父として、また母として育つわけです。子どもを自分が育てていると思っているけれども、実は子どもが私を育ててくれているのだという見方をもって生きることは大切です。母として、父として、教師として、自分を育んでくれるような、よき子どもに会えるかどうか、子どもとの関係をそのように見ることができかが重要です。よき生徒に会うことを通して、自分が生徒によって成長させてもらっているのだというこの感覚を持てるかどうか、教育の現場の中にながら、自分というものを見失わないために、とても重要な点ではないかと私は思います。

今日は教育詩学、歴史人類学という少し耳慣れない観点から子どもの問題や教育の問題をお話したいと思っています。皆さんのお手元には配布資料があるかと思います。

### 教育詩学・歴史人類学から教育を見直す

- ① 認知能力や理性だけでなく、日常的であるとともに根源的な人間の能力に光を当てる
  - 直観、感情、身体知、経験知の働きと熟達を解明する
- ② 教育を動かしている意識（考え方やものの見方）だけでなく、無意識にも光を当てる
  - 教育の語り方や言葉の詩的使用法に注目して分析する
  - 言葉の背後にある表情や身振りを糸口に解き明かす

状況の渦中で、相互作用的な関係性を前提として、個別の多様性を大切に、総合的にみていく点が特徴

この教育詩学、あるいは歴史人類学という分野が教育研究のなかに入ってきたのは、日本では2000年代に入ってからのことです。これまでの教育研究では、研究者が教育現場で活動している人たちを研究の対象として客観として捉えて調査や分析をするということが一般的でした。こうした視座にたっ

て、果たして、日々刻々と変化しつつある現場の状況、現場を構成している人たちの状況を、十分に把握できるのだろうかという疑問が、この新しい教育詩学や歴史人類学的教育研究の出発点にありました。研究者もまた、常に変わりつつある一人の人間であること、また調査においてその現場から全く別個に存在するのではなく、相手との関係性のなかで調査は行われていること、こうした事柄について正面から考え、教育研究の方法論や視座から考え直していこうとしたわけです。ですから、人が人と出会って関わることで互いがそれぞれに変化を遂げていく場として教育の現場を考えていくことが大切だという立場をとっています。教育とは、教師が生徒に教える一方的なものではなくて、場を共有していく中で、人間がお互いに何らかの影響を受けて、そして、その中で変わっていくこと全体を指すと考える立場です。また、教育や学習というと、頭の中に知識を詰め込んでいくようなイメージがありますが、それだけで終わらず、身体で覚えるような学習や修練、練習、或いは、相手の表情を読むといった人間関係の結び方のわざなど、多様な学びを研究していこうとしています。このような学びは、生活を通して実際には、他の人たちのやり方を見よう見まねで学んでいく形で行われています。しかし、このような広い意味での学習については、現在でもまだそれほど研究が進んでいないという段階です。

このような広い意味での学習について少しイメージしてみましょう。例えば、夏休みを終えて久しぶりに友だちに会ったとき、何か急に大人びたなとか、ひとまわり大きく成長したなど、人間としての深みや大きさに気付くことがあるかと思います。あるいは、素敵な人との出会いがあったのかなと想像するほど美しくなったことに気付くことがあります。こうした変化に気付く能力というものを人間は持っているのです。教育現場での実習に行き帰って色々な経験をして戻ってきたときもそうでしょう。実習から戻ってきた同級生が、以前とは少し違っているなど気づくことがあります。また、アスリートの活躍も、単にすばらしいパフォーマンスをした後だけでなく、そのような成果をあげる何かそのアスリートに宿っているのではないかと推測する力を私たちはもっています。話し方や顔の表情、物腰など、インタビューの受け応えの様子、声の裏に自信を感じるとか、いろいろな形で、私たちは、このアスリートがいま何か変わりがつつあることに気がきます。次の試合で大活躍するかもしれないと、そんな予感を抱くこともあります。

逆に、良い成果をあげてきているにもかかわらず、アスリートの表情からは、何か暗い影を読み取る場合もあります。焦っているのか、悩みを抱えているのか、迷っているのか、などなど、ふっと思いがよぎることがあるのではないのでしょうか。これが人間に備わっている大事な能力なのです。その人の将来がその人の仕草や声や表情といったものを見ている間に、奥に何か透けて見えてくる。この能力があるからこそ、人間は、人を育てていくことができると言われています。しかし、目に見える形でデータで測定したり証明したりすることが難しいために、この能力はこれまで、科学研究のなかでは積極的に主題として取り組まれなまま現在に至っています。

こんどは授業の場面でイメージしてみましょう。教室という空間は、人それぞれに色々な状況を抱え持った人たちが集まる場です。授業が始まると、担当の教師のリードもあって、その場の空気というか、皆の集中力や場の雰囲気が変わってきます。教室という場がまるで生きているかのように、変化していく。そして、その場に居る人たちの意識や感情をスポンジのように吸収して変化し続けていきます。教室や講堂の建物は、単に建築物だと人は思っていますが、そうではなく、「場」というものは生きているのです。ですから、授業の場を活かしも殺しもするのは人間の作用によるのだということが出来ます。皆さんも多分さまざま授業に出る、あるいは、演劇やコンサートの舞台を観たりといった機会を通して、こうしたことをすでに体験していると思います。このように「場」を構成している見えない力のようなものに敏感になること、また教師として、「場」を作っていく工夫やわざを身に着けていくにはどうしたらよいかを、私たちはもっと意識的に研究していく必要があるのではないかと思います。

教育というのは、こうした「場」の力をうまく活用して、教師自身も、そして生徒もそれぞれが変わっていく作用だといえそうです。場を構成している目に見えない何かは、ではどうしたら解き明かすことができるのでしょうか。私は視覚中心の世界の中で失われたもの、目に見えないものに注目し、それに光を当てたいとずっと考えてきました。近代という時代は、おおざっぱに言って、とにかく視覚中心に物事を考える時代だといえます。つまり目で見えるもの、目に見える形で測定や証明ができること、そうした人間の認知の能力や理性を中心とした知性こそが大切で、それを解き明かすことが近代以降、教師のための学問として誕生してきた近代教育学の主眼でした。時代でいうと、17世紀から18世紀のことです。近代科学は測定と測定による証明、そして客観性を大切にしてきました。昨夜はちょうど満月、それも月が隠れたり出たりと珍しい皆既月食という記念すべき日でした。その様子を天文好きの人たちは、望遠鏡でじっくり眺めていたようです。遠い世界を見るための望遠鏡、そして、小さなミクロの世界を見るための顕微鏡—このような道具が次々と発明されたことで、私たち人間が見ることができる世界は、遠い世界、そしてミクロの世界と急激に拡大しました。めがねもそうです。視覚によってものを見ることが、ものを把握し理解することとほぼ同じことのように考えられるようになった時代ということもできます。目で見て分かれば、それで世界が分かったと考える時代では、目に見えないものは、不可解なよく分からないものとして捉えられるようになります。しかし、人間は目には見ることはできないけれども、人間の存在そのものを支えている何かの世界にあることについて忘れてはならないでしょう。私という人間をこの世界に生れ落ちることを可能にしてくれた何かの力、私という存在を生かしている力は、目に見える形で示すことはできないけれども、確かにあるのだと私たちは感じ取ることができます。

人間の「思い」もこうした「何か」ではないかと思えます。「明日がいい一日でありますように」と願うこと、あるいは、子どもに、幸せな人生が訪れるようにと願いを込めて名前をつけること — こうしたときに抱く人間の願いや思いは、実は、この世界や人間を深いところで突き動かす大きな力として作用しているのです。名前というものには、親が子どもにこうなって欲しいという願いが込められています。その願いは、やはり名前を受け取るということは、人の思いを受け取って、それを抱いて生きていくということですから、名前をつけるということは、とても重要な意味をもっています。自分に関わるクラスの生徒一人ひとりの名前からは、その親や祖父母の願いがうかがえます。今日は話の冒頭で、「子どもというものを一括りにして捉えて済ますことはよくない」と言いました。人間はみな、一人ひとり違うということ — この一人ひとりの人間のかげがえのなさをきっちりと受け止めていかないと教育はうまくいかない、と言われていています。一人ひとりに固有につけられた名前があるということは、その名前に託された思いとともに、一つのメッセージとして受け止めていかなければならない。人は「その名前を生きている」ともいえるでしょう。そういった様々な、目に見えないけれども世界や周りの人たちに託す思い、「明日は良い1日でありますように」、「いい就職先がありますように」、「いいパートナーが見つかりますように」、「健康で美しくありますように」と、未来に向けて何か期待し、希望や願いを抱くこと、また人に思いを託すこと — こういうことが実はこの世界の未来を作っているのです。こうした目に見えない思いや願いを察する力というものを、私は人間にとってもっとも根源的な感覚である、「触覚」に注目してアプローチしています。

それではここで、少し、皆さんに触覚というものを体験してもらいたいと思います。ではまず、皆さん目を閉じてください。そして右手の手のひらと左手の手のひらをこのように合わせてください。では、右手の感覚に意識を持って行ってください。右手が左手に触れているという感覚で、少し両手の接触面に感覚を集中してみてください。そのとき、おそらく「右手が左手に触れている。左手は右手に触れている」という感じがすると思います。その感じを味わってください。(しばし沈黙)

はい、それでは、一度手を離してください。では、一度、深呼吸をして感覚をリセットしてください。では、目を瞑りましょう。また右手と左手を合わせてください。そして今度は、「左手が右手に触れる」という意識を持って、左手の手のひらに意識を持って行ってください。そうすると、左手が主で、右手がそれを受ける側になっているようなそんな感じがしてきますか。(しばし沈黙)

### タクト（触覚・判断力・振る舞いの知）

・ラテン語 *tactus*, 独語 *Takt*, 英語 *takt, tact*

- ・触れるように見る・触れるように聞く
- ・環境との接触面の感覚
- ・動きのなかの判断や決断 ー 身体知
- ・機を見極める分別
- ・心の機微がわかる能力、心のものさし



はい、ご協力ありがとうございました。いま試していただいたのが、意識の置き方によって、触れる・触れられるという感じが変化したかだと思います。これが触覚の特徴だといえます。

触覚というのは少し風変りな感覚です。五感のうち、視覚や聴覚、

味覚などは、目、鼻、舌などそれぞれの感覚器官が外の情報を感知することによって生まれる感覚と一般に理解されていますが、それらはいずれも、私という人間が中心にいて、つまり、主観ないし主体として存在していて、外の世界の情報を客観ないし客体として把握している状態だと考えられています。そこでは、見る人と見られる物や人という具合に、主観と客観、主体と客体、主と従、能動と受動がはっきりと分かれています。しかし、触覚は、意識の持ちようによっては、触れてもいるし、触れられてもいるということが起こり得る。主と従、主と客、能動と受動といった二つの間の関係が、いつでも入れ替わる可能性がある。この少し不思議な感覚である触覚は、感覚というものについて、あるいは人間の感知や認知の能力についての見方を根底から変えていくきっかけを与えてくれています。主や客、能動と受動といった区別ができないような世界として、私たちはこの世界を捉えることもできるのです。人間がこの世に生まれそして、生きていく様も、実はこの私が主体的に生きていくのではなくて、生かされているとみることが出来ます。この世に生まれた私は自分の決断でこの世にやってきたというより、むしろ、生まれ落ちたことでもいうような、能動と受動が混ざり合ったような感じがある。よく考えてみると、人は、自分が生まれた時と死ぬ時について、記憶をもつことはできないのです。周りの人たちが思い出語りや語りを通して、自分が生まれたときのことを自分の物語の一部として私たちは記憶しているだけです。私たちが生まれて、そしてこの世で限られた時間を過ごして、そして、この世の中から去っていくという時に、始まりと終わりというもの自分が自分でいまいとつわかない感覚でしか捉えることができない。目で見えるものだけではなくて、感じとることを可能にしている根源的な感覚というのを、私たちはもう一度見直してもいいのではないかと考えています。

この根源的な感覚は、タクトと呼ばれています。語源としては触覚あるいは触れることによって生じる感情という意味をもちます。プリントのほうに少し解説を載せておきました。プリントでは両手を合わせた絵がありますが、そちらをご覧ください。皆さんは神社やお寺にお参りした時やお祈りをするときには、こうして両手を合わせるといいます。なぜ、手を合わせるのか。拝むということは、自分がこの世に生まれ落ちたこと、そして今こうして生きていくことの不思議を感じ、それには私を超えた何か大きな力が働いていることを確認する行為です。自らの力で生きていくということと、大きな別の力によって生かされているということ、この能動と受動という両方の感覚をもって私が今ここに生きていくことに思いを馳せる行為です。また、立ったまま拝む時に、私たちは姿勢をよくして立ちます。そうすると天と地の間の軸に自分の身体が合って、天と地と人が一直線に並ぶという感覚を味わいます。この感覚は触覚という語源をもつタクトと呼ばれているものです。人間の根源感覚といえます。

さて、人間がこの世に生まれて一番最初に触れるものとして、代表的なものは、お母さんの胸でしょう。お母さんの胸に抱かれてお乳を飲む時、赤ちゃんはお母さんの胸に触れます。お母さんの胸に触れている間、赤ちゃんは守られているという安心感をもちます。これが触覚の最初の体験です。やがて成長とともに、ハイハイ歩きをしたり、掴まり立ちをしたりという具合に段々と歩けるようになっていくにつれ、今度は自分の周囲に触れるようになる。机に触れたり、椅子に触れたりします。さらに、歩行が自由にできるようになると、自分が置かれたその空間のなかで、どこに位置しているかということ、実際に物に触れるということをしなくても、大体分かるようになります。空間感覚が発達してくるわけです。

大人になるにつれて、一々触れなくとも分かるようになります。まさに「触れずして分かる」とでもいうような触覚が発達してきます。これは、場や集団のなかで自分の占めている場を分かるという能力と繋がっているのです。ある組織集団の中で、自分の立ち位置が分かるということは、社会に生きる人間に求められる能力ですが、「出しゃばり過ぎたかな」とか「遠慮をしすぎたかしら」といった周囲との関係や周囲からの期待といったものを感じ取り、その集団の中で自分に求められている役割がわかることが必要となります。空気が読める能力ともいえます。集団という目に見えない括りの中で、私たちはこうしたことを瞬時に判断しながら行動しています。これも、触れずして触れている感覚です。触覚というのは、ただ実際に触るという感覚だけではなくて、集団の中で自分がどの位の場において、何が求められているかなど、環境の中で生きている時、人間とその環境との接触面を感じ取って生きる感覚までを意味しています。これがタクトという感覚です。ですから、人間はこの環境の接触面の感覚を鋭くしたり、鈍くしたりという調節を上手にやっていかないと傷ついてしまうのです。

皆さんが毎日接している人たちの中で、非常に濃い関係というか、仲の良い集団と、そうでもない集団ができあがっていると思います。また、親しさの度合いも相手によって様々でしょう。たとえば、相手はとても親しいと思って話しかけてきたとしても、こちらがそれほどの関係を期待していないという場合はその時、私たちは相手との関係性において、互いの心の距離を測っているのです。互いに予想し合っている互いの心の距離が同じときは、コミュニケーションはスムーズにいきます。しかし、相手にここまで踏み込んだ物言いはしてほしくないというときに、相手があまりに自分の内面に入り込むような言葉や態度をしたときには、私たちは不快な気持ちになります。その見えない心の境界面というか境目を作っているのも環境との接触感覚なのです。

ですから、触覚、タクトというのは、環境の接触面だけれども、それだけにとどまらず、相手との心との距離を測る能力なのです。これを私たちは駆使しながら、人間関係を営んでいます。その心の距離を測る時に私たちは何をしているかという、相手の表情であったり、目の輝きであったり、顔のつや、あるいはまた、背中表情など身体に宿っている様々なサインをキャッチしようとしているのです。そうやって、言葉に出して伝えられることだけでなく、「言葉にならないサイン」を読み取り、相手が欲していることを察しているのです。

こうした察する能力としてのタクトが家庭ではもちろんのこと、教育の現場で求められているのだと思います。同僚との関係もそうですが、子どもとの関わりの中で、言葉にならない言葉を読み取り、総合

的な観点で相手を捉え、理解していくタクトを養っていかないと、お互いがお互いの心の距離を測りながらコミュニケーションを取るのが難しくなってくるわけです。

では、このタクトをどうやったら鍛えることができるのかという、最後の主題に入っていきます。

### タクトを磨く

- ・タクトはタクトを用いることを通して磨かれる
- ・経験を糧にする手法を確立することが大切

そのためには・・・

- ・現場の状況を読み取る力を養う
- ・優れたパフォーマンスから学ぶ
- ・体験・経験を振り返り（実践の反省）をヴィジョン（理論的思考）と繋ぐ
- ・ヴィジョンをイメージトレーニングで膨らませ具体化する



タクトはそれを毎日の生活のなかで意識的に使っていくことで磨かれていきます。それにはまず、環境との接触面というものに敏感になることが必要になってきます。タクトは使わないと磨かれていきません。スポーツなどいろいろな技は、トレーニングを1日休むと3日遅れてしまうなどという人もいますが、タクトも同様です。毎日の積み重ねが重要で、まずは身近な友人やお家の方々の言葉にならないサインを読み取る、察する訓練から始めましょう。表情や目の動き、声の調子などを通して、相手がどういう状況でいるかということに注意を払い、察するというを毎日の課題にしてみてください。そして、皆さんご自身の環境との接触面がどんなだったかということ、その日の振り返りという形で文章にしてみる、つまり接触感覚を意識的に探り、それを言語で表現してみる、日誌につけてみることをお勧めします。

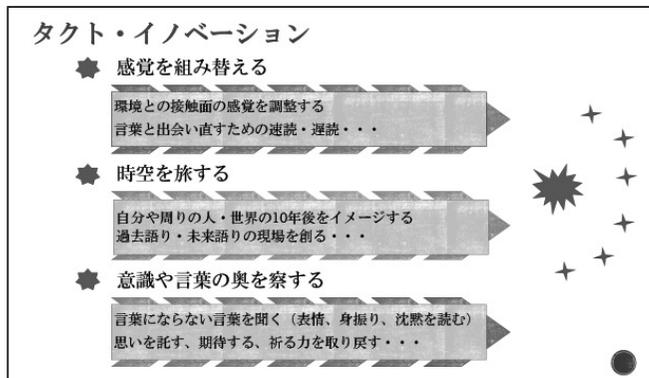
実際に教育現場に行った時には、実習日誌を書きますが、タクトの訓練にとっては毎日がタクトの実習です。その意味で、毎日の自分の状態を振り返り、記録していくことが重要になってきます。そのほか、環境との接触面の感覚を鋭くするには、読む、書くといった日常的に当たり前に行っているようなことを、敢えて意識的にその速度ややり方を変化させながら見直すというトレーニング法があります。皆さんご自身の身体を使って、毎日、少しずつ小さな実験を重ねてみましょう。今日は、読むということについての提案をします。皆さんは毎日、本を読んでいると思います。本は大体、趣味で読む本もあるでしょうし、勉強で読む本もあると思います。その「読むという行為」で実験をしてみることを提案したいと思います。読む速さを変えるという実験です。速読のすすめというのは最近よく耳にしますが、敢えて遅く読むということもやってみてはと思います。そもそも読むという行為は、文字を自分の身体の中に入れていくことです。このときにも環境との接触面の感覚が関係しています。読むことを通して自分のなかに文字が情報として入ってくる、それがイメージを形成したり、記憶として残っていたり、また感情が生まれたりします。実験を通して、そうした自分のなかの変化について敏感になってみようという話です。速読であれば、例えば新書版の本であれば、とりあえず1日か2日で1冊を読むということを1週間やってみるという方法もあります。そのときは、いちいちじっくり読むということは後回しにして、入ってくるキーワードをどんどん追いつながら最後まで読むことになります。そして読み終わった時に、自分の中に残ったもの、それは、キーワードでもいいけれども、メモする。ここで大事なことは、自分の中に起きた心のさざなみのような感情や思い、イメージなどもメモしてやることです。すると今まで気付かなかったことが分かることもあります。

では、遅読の方ですが、お勧めは比較的、古典と言われる百年ぐらい経っている書物を選んでみましょう。小説でもいいし、自分が好きな作家の作品でもいいです。こちらは1週間で1ページを読むという位のペースでよいでしょう。同じページを1日1回、月曜から土曜日まで読む。何度も何度も読むことになります。確かに、同じページを読んでも、そこには同じことしか書かれていないのですが、これを何度も読むということを繰り返すことを通して、自分のなかにある変化が生じることを確認してもらいたいのです。毎日、読んだ後には、速読のときと同じように、自分の感想やイメージを記録してください。自分の中に起きた気持ちの変化、「今日は何か集中して読めた」とか「昨日読んだのと何か違うイメージが湧いてきた」、それでもいいです。3日目以降は書き写しながら読む、声に出して読む、人に

読んで聞かせるなど、読むという行為に変化をつけていってください。この間、毎日メモは取り続けます。同じものを月曜から土曜日までずっと読むということを繰り返しながら、私の中に起きた変化を記述する。すると、同じものが自分の側の変化によって違って見えるということを感じ取ることができるでしょう。これは日誌にその日のことを振り返る、つまり過去についてイメージしたり、想起するという作業です。タクトのトレーニングをもう少し発展させると、今度は、未来をイメージしてメモを取るという段階に入っていきます。明日起きるかもしれないこと、明日はこうなりたいと思う願いを書くという習慣です。夜寝る前に、次の日のこと、さらに数日、数週間、数か月、そうやって来るべき未来のことをイメージし、それを言語化して床に就く。こうした思いやイメージは普段は意識しないままで暮らしています。それを取って言語化していくのです。「未来はこうなりたい」「私はこういうことをするのだ」「自分の一番自分らしさを出せるこんな仕事をしたい」など、自分がしたいことを言語化し、さらに、そんな現実が訪れたときに自分のなかに生じる感情までイメージし、記録していくのです。皆さんがこの大学に通うという同じ毎日を過ごしていたとしても、その毎日の一日一日は違っているはずで、自分にとっての毎日を新鮮だと受け止められる感覚を養っていくためにも、過去の想起だけでなく、未来のイメージ化も大切です。そして「自分の中で何かが変わりつつある」「何かが変わってきている」ということを確認する。そして、未来の自分を見据える目を養う。どれだけ具体的に自分の未来を思い浮かべることができるかというこのイメージ力は、タクトの重要な働きです。

授業の準備をするときにも、この未来をイメージする力は重要になります。教案を作りながら、この教案に従って教室で授業をしたならば、クラスの生徒の一人ひとりの顔が思い浮かぶまでイメージできなければなりません。このテーマだったら、クラスのA君はどんな顔をして私の話を聞かろうか、どんな質問をしてくるだろうか、B子さんはどんな反応をするのか、退屈そうにするのか、それとも驚くかなといった予想をしながら教材の準備をするようでありたいものです。次の日の授業の風景がどれだけ具体的にはっきりと目の前にイメージできるかで、次の日に自分が経験した事柄を受け止める、経験から学び取るものを吸収する、など経験との出会い方も違ってきます。同時に未来へと思いを込めていくことも重要です。「明日の授業、明日の現場が面白いものでありますように」「私の思いが伝わりますように」「皆がその場で楽しい思いができますように」などです。毎日、私たちは挨拶をかけ合います。「おはよう」「お帰り」と、言葉をかけ合うことによって、私たちは明日という日に向け互いの願いを投げかけあっているのです。ですから、お互いに願いや思いというものを掛け合っていくことによって、私たちは自分の置かれている環境、場というものに力を与えていっているのです。毎日の自分の日常をタクトのトレーニングの機会としていただければと思います。

数年前にハワイ大学で東西哲学会議という、世界中から哲学者が集まって一週間合宿しながら議論する会議が開催され、私も招かれて講演をしました。その際、驚いたことがあります。会議の開会式で、大学側の現地の方がまず300人ぐらいの聴衆の前に出てきて、チャントを唱えたのです。チャントとは祈りの言葉です。それは、「世界各地から集まってきた人たちが一緒にテーマについて語り合い、そして、この場で生まれるその思いが世界を幸せなものにしていくことができますように」、そして「毎日



の議論を通して、私たちの未来に光がやってきますように」ということをまず現地の言葉でお祈りし、その後、同じ祈りの言葉を英語で唱えてくださったのです。色々な国からやってきた哲学者たちでざわめいていた会場は、その祈りの言葉で一気に引き締め、思いを共にする豊かな場が誕生したのが印象的でした。

ヨーロッパでは16世紀ぐらいまでは、学校では授業が始まる際に、必ず、神に感謝し、神の栄光をたたえ、また「今日の学びが私の将来やこの世界にもっと多くの光を運んできますように」という意味のお祈りをみなでしてから、授業を始めるのが普通でした。学校という場、教室という場ではたくさんの人間が一堂に会して場を共有し同じ時間を過ごすわけです。それぞれの人間は自分の置かれた様々な状況によって、それぞれに心の波長をもっているのです、始めは互いの周波数がうまく合いません。その周波数を調和させていくことが場作りには必要になります。その人たちが心を一つにしていくには、思いを一つにするような工夫がなければなりません。祈りにはそれを実現する力がありました。ハワイで祈りの言葉を聴きながら、それを思い出していました。そこまで祈りという形でなかったとしても、同じ場を共有する中で、互いの思いと願いを込めあって挨拶をかわしたり、共通の主題について考えたりすることを通して、私たちは場を作り上げていくことができます。また、個人個人が、自分の心の周波数を、呼吸を通して整え、また気持ちを互いに合わせていくことで、場の雰囲気を変えていくこともできます。たとえばお腹、丹田に少し意識をもって呼吸するなど、そんな短い時間を少しでも持つことで、自分のなかを流れる静かな時間や自分なりのリズムを感じ取ることができるだけでも、私たちの環境面との接触感覚は、大きく変わります。これからの毎日を、皆さんどうぞフルに活かして、タクトを養っていただければと思います。

ご清聴ありがとうございました。

**一色：**鈴木先生、どうもありがとうございました。教育の原点のお話と、生きている人間の次元のところと教育が触れ合うところのお話をいただきました。

それでは、野中先生に、今お話をいただいたことに関して、コメントをいただきたいと思います。どうぞよろしく願いいたします。

**野中：**神戸大学の野中と申します。よろしく願いいたします。私自身は知覚と行為、知ることと行為することを専門とする心理学者としていろいろな場面での技能の獲得を実証研究してきました。少しスケールが違うところがあるのですが、自分の研究、自分のフィールドにおいて、もしかしたら、このようなどころが関連してくるのかなというのを具体的な事例と共に少し紹介を

して、コメントさせていただきます。

私が関心をもっているのは、日常の場で起こる熟達です。日常の場に出た時に、何が起こるかということ、状況が入ってくるということです。画一的なところではなくて、日常に出た時に、一人ひとりの状況が入ってくる。更に、状況を視野に入れると何が入ってくるかということ、そこでは、臨機応変に生まれる。状況が変わるわけですから、動きの中の知というのが出てくるわけです。状況とセットになった人の振る舞い、つまり環境と接触する「際（きわ）」に起こることについて、私の方から少しお話させていただこうと思います。

環境と接触する際に生まれる秩序について、非常に簡単な事例なのですが見ていただきます。これはジョリージャンパーという遊具です。ご存知でしょうか。赤ちゃんが遊ぶ遊具です。これは8ヵ月の子どもです。もちろん、何かゲームであれば、こうやって遊ぶとマニュアルで説明できます。でも、8ヵ月の子どもにマニュアルはないわけです。言葉で説明をすることはできない。しかし使い方を説明することはできる。そういうところで、こういった遊具に8ヵ月の子どもが置かれた時に、遊び方をどうやって発見していくかというのを研究したグループがいます。

あかちゃんは、最初は何をしいのかかわからないわけです。一週間経つと、それほど変わりませんが足も、足をばたばたさせて何か少しは跳ねようとしたりする。3週間、4週間と経っていくうちに、自分でその状況との接触の中に「こうやると面白い」と遊びを発見していくわけです。ある赤ちゃんの振る舞いの秩序が、その場で環境と出会う中で生まれてくるわけです。興味深いことは、この赤ちゃんが「何を学んだか」ということなのですが、例えば、この赤ちゃんがある仕方で身体を動かすことを学んだとします。そうするとバネと振り子、バネと錘（おもり）と同じなので、もし、赤ちゃんに錘をべたっと貼ると、同じ動きをしていたら跳べなくなるのです。ために、この研究グループは、赤ちゃんの背中に重い錘をべたっと貼ってみました。すると赤ちゃんは、何事もなかったかのように跳び続けたのです。赤ちゃんが「獲得したこと」というのは、「動きそのもの」ではない。もう少し高次の、環境との関係形成に向けて自分の振る舞いをどう調整するかということなわけです。

この例を見ると、特殊なケースに限ったことではないのかと思われると思うのですが、赤ちゃんが日常場面で直面していることもまた、もちろん状況はそれぞれ違いますけれども、常に具体的な場に埋め込まれています。例えば歩行がいい例です。歩行は、重力の中で重心を前に倒して推進力を得つつ、なおかつ足を踏み出して立位を保つという重力と身体との関係を獲得していく過程なのです。このようなことは、非常に一般的に言えると私は考えています。もっと日常的な場面で、子どもの振る舞いが環境と接触するところにどういった秩序が生まれるか、というのを、ひとつ見てみたいと思います。

東京大学の佐々木正人先生の研究グループが、ある2つの家庭の母親に「何でもいいので、赤ちゃんがしていることをビデオで撮ってきてください」と頼みました。佐々木先生の研究グループに参加していた私は、200時間ぐらい集められたその映像から何かを見てみようとしたことがあります。その時に私が選んだのが、ばらばらしたブロックで子どもが遊ぶ行動です。14ヵ月ぐ

らいにブロックを与えられて2歳ぐらいまで遊ぶのですが、この子どもは非常に片付けが好きで、ブロックを容器に入れるということを何度も何度も繰り返します。何ヶ月も繰り返します。その繰り返しの中で、環境とこの子どもの振る舞いが接触する際に何が起こっていたのかというのを見てみました。このビデオが15ヶ月のときのもので、2歳になった時は、このビデオのような片付け方もするようになります。いろいろな変化があるのですが、試しに環境と赤ちゃんとの接点で起こっていることを記述する一つの切り口として、少し姿勢を見てみました。

すると、全部で10場面を撮ったのですが、全部の場面でこのいずれかの姿勢に赤ちゃんの姿勢が分類できました。その中で、姿勢の発達をみると、最初はお尻について座っているのが非常に多いのですが、経験を経るにしたがってしゃがむ姿勢が多く見られるようになり、そのままの姿勢で床面を移動するような場面がどんどん増えていく。もちろん床の水平面にばらばらと散在したものを床に近い位置で扱おうとするとき、しゃがみながら動くというのは、非常に都合がいいわけです。低い位置で広いところをカバーできる。そういった状況における姿勢の発達みたいなものもあるのだ、ということが見えてきました。例えば教科書では、姿勢発達というのは空虚な何もないところに描かれた赤ちゃんの絵で、「ここに座って立ち上がって」と何か赤ちゃん一人で起こっていることのように説明されますが、実際には具体的な場があって、それは環境との接触面において生まれている秩序なのです。

もう一つの秩序のレベルとして、先ほどのブロックの片付け場面ですが、赤ちゃんの側だけではなくて、例えば身体の外を見てみます。皆さんも今、机の上にいろいろなものを置いて、独特な形で配置をしていると思いますが、環境と行為が出会う中では、身体の外の調整みたいなことも起こってくる。こういった調整が、デザインとか建築の最初の姿だと思います。例えば、先ほどの赤ちゃんですと、蓋を用いてブロックを集める時に、ブロックを容器に入れてから戻ってくる時に、どういように蓋を置くかというのを見てみると、必ず蓋の脇、右側にブロックの山がくるような配置を必ず预期的に作っていたりする。こういった身体の外のモノの配置といったレベルでも、周囲の調整などが起こっていたりする。

もう一つ、不思議な現象なのですが、先ほどの例で、赤ちゃんが容器にブロックを集めているのですが、途中で逆に容器からブロックを出してしまう。逆流するようなことが起こったりするのです。どういう時に起こっているのかというのをみると、例えば、容器を動かすとかブロックを外すとか、今までやっていたことと違った環境の使い方をすることが起こった直後に起こりやすいのです。先ほど配置換えをして自分の場を作っているということを言いましたけれども、逆に場の構造に私たちの行為が導かれるという側面もある。環境との接点に生まれる行為の秩序の周囲には、具体的な場の構造がある。これは、心理学では昔から注目されてきたことです。

例えば、チンパンジーの類人猿の知恵試験という有名な本があります。その中に、天井にバナナをつけて、そこにチンパンジーを連れてきたときにどうするかという話がありますが、チンパンジーは台を積み重ねてバナナを取ってみせます。しかし、このような台が壁にぴったりと付いていたりすると、何もないかのように素通りしてしまったりする。逆に言うと周囲の場の構造に、

可能性を見ているということです。これはものだけではなくて、他者についても言えることです。たとえば、押すと点灯する電気があって、それを大人が頭で押して電気を点けてみせたとする。その時にふたつの条件で乳児に見せるわけです。一方では、手がふさがっている状況で頭を使って電気を点ける。他方では、手が自由な状況なのになおかつ頭を使って電気を点ける。どちらの状況を見た時に、赤ちゃんは頭を使って電気を点けることを真似するのか。どちらだと思いますか？そうです。手が自由なときの方を見たときに、赤ちゃんも頭で電気をつけようとするのです。手が自由なのにもかかわらず、手で点けないで頭を使って点けているというところに赤ちゃんは意味を見い出している。このことは、赤ちゃんが他者の身体の動きそのものではなくて、他者が周囲と作っている関係に何か意味を見ているということを示唆するものです。環境との接触に生じる秩序というのをお話してきましたが、そこには、それを調整するような資源として場のさまざまな構造があるわけです。

最後にまとめたいと思います。今日のテーマは、環境と行為が会う中で、環境との接点に生まれる学びでした。日常的な技能の熟達をとらえると、周囲の状況がでてくる。そして、状況が出てきた時に、身体の動きが出てくる。動きの中の知、環境と接触する際に生まれる秩序が存在する。私たちの振る舞いは、周囲の環境にあるものと出会いをもたらず価値に対して非常にセンシティブである。更にそのセンシティブであることの背景には、周囲にあるもののいろいろな意味や価値を知らせるような構造、資源の存在がある。そんなふうに私は思っています。私の発表は以上になります。ご清聴ありがとうございました。

**一色：**野中先生、どうもありがとうございました。二人の先生方が環境という言葉をお使いになりました。もう少し、お二人の先生方にいろいろとお話をいただいて深めていきたいと思います。野中先生のコメントに関して、鈴木先生は、どのようなことをお考えになりましたでしょうか。

**鈴木：**ちょうど、野中先生はアフォーダンスというところで、特に日常の中にどんな複雑な絡みがあって、その絡みの中で環境との関係をどのように見ていくかということにかなり細かいところまで詰めていくという作業をしておられるというのは存じ上げております。ただいまのお話を伺いまして、一つひとつの実験の中で、例えば、小さい子どもの実験の時に大人が声をかけたりするなど、他者との関係性も全部含み、視野に入れてやっていくのはきつと大変なのだろうなと思いました。特に、環境と言った時に、私たちはどうしても、自分の周りのものと思ってしまって、自分というものがどこにいるかを忘れてしまうかと思います。特に私の研究室の方では、リフレッシュも含めた研修という形で来られる現場の先生方も多いのですが、「自分の学校現場はうまくいっていない。何とかしたい。」と強く望んでおられる先生がよくおられます。熱心な先生ほどそうなのですが、こうしたご発言をよくよく見ていくと、現場を語るときに、自分がどこに、どんな立ち位置で存在しているのかという観点が見えなくなっている場合が多いことに気がきます。現場の状況を云々するのに、自分はどこか現場とは離れた場において、俯瞰の目をもって現場

を眺めているような感じです。先生ご自身も、そのうまくいっていない環境の一部で、もしかしたら主要因の一つかもしれないという発想が欠けていることが多いのです。私自身もその真ん中にいて、一緒に関わることによって、現場の状況は出来上がっているのだという感覚で毎日を振り返ることができるか、自分が置かれた世界を見ることができるかという辺りが、環境という主題を考える上で、いま重要なのではないかと思います。

**一色：**それでは、私から伺いますが、タクトというお話で全体を具体的にお話していただきましたが、そのタクトのところでは場の共有とか場の力みたいなのがあって、そういうところで、学生に毎日いろいろな格好でいろいろなことをやっていくことが必要なことだと言われました。例えば本を読む読み方とか、いろいろなことをおっしゃっていただきました。実際に例えば、小学校の教員になる者にとってとても意味があると思うのです。その部分と今の学校教育、文部科学省がやっている学校教育、学習指導要領とは相矛盾しないのでしょうか。その辺りいかがでしょうか。

**鈴木：**私は今、京都市の教育委員として、教育の現場で先生の養成をしているところとも関わっているのですが、今日もお話させていただきましたが、感情とか身体、実際に目に見えないけれども人間を動かしているものというのは、学習指導要領には書き込めません。書き込めないので言葉では謳われていませんが、その学習指導要領をきちんと守っていくために、備えるべき能力や学校教育の現場の質として、これは当然プログラムとして組んで先生方もそれに向けて養成するということが前提になっていた部分だと思います。ところが、その養成方法というのが、例えば、現場でその一人の子どもが「なぜ私が思うように応えてくれないのか」といった時に「強がっているのだろうか」或いは「心の中に闇があるのか」「背中が寂しそう」。そういったことの個別の状況の中に落とし込んでいく時のその能力というものは、普通、社会の一員として日常を生活している人間であれば、普通に備わっているものと思われていたと思います。一色先生のご指摘のように、その普通に生活している日常の中で普通に持っていたはずの能力が、さまざまな現代の動きの中でだんだんと衰えてきてしまっている。教育の現場の中で、子どもの背中を見て、子どもの顔を見て、子どもの状況というのを押し量る能力があって、教えるべき学習指導要領というのが生きてくるのですが、下支えしているその部分が弱ってしまっているので、普通に言語化可能な部分だけを目標に設定しても、もはやそれを実現しにくくなってしまっていると言うことかもしれません。

今日は、読む、書くについてもお話したのですが、やはり、語るということについても同様です。語り方一つにしても、学校教育の現場では「命を大切に」とかそういうことを言うのですが、「命を大切にしましょう」と言ったらそれでもう、命を大切に子どもがたくさん育つかというと、そうではないわけです。どのようにしたら本当にそれを実現可能かということろまで、議論を進めていくことができないままに、単なるスローガンや決まり言葉で「命を大切にしましょう」と言っているだけで、中身の議論

に入っていないままに終わってしまうことが多い。言葉の使い方がスローガンのように決め言葉だけを繰り返すというように硬直しているということは、その人間の考え方も硬直化あるいはパターン化してしまっているということです。ものの考え方が固まってしまっている人間は使う言葉も固まっているということです。語る言葉に注目し、言葉の型を崩していくと同時に、ものの考え方、捉え方も柔軟にしていくという作業が必要だと思い、今日はお話させていただきました。読む、書く、そして話すということに着目して思考様式や行動様式に迫ろうというのが教育詩学のポエジーの学という所以です。学習指導要領で教えるべき事柄の枠を決めてしまうことによって生じる問題点については指摘されてきていますが、古くから芸芸の世界では、人間は型がなければ、型を抜けることもできないといわれているように、基準や指針という枠それ自体はいずれの世界でも大切だと思います。ただし、それを実現する上での大前提となるものを同時にきめ細かく支援していく必要があると思います。たとえばここでは教師の実践的能力や判断を下支えしているような、人間の日常を生きる力や感覚は敢えて意識的に養成に向けて支援していく必要があるでしょう。ここが弱体化しているというか、硬直化しているという点に問題があるのではないかと考えています。

**一色：**ありがとうございました。総合子ども学科の学生は幼稚園教育実習や保育実習など実習に行き、現場でいろいろな子どもたちとどんな形でやるかということで、やはり環境設定というのがありますが、そういう幼稚園や保育園での環境というのと先生がおっしゃった環境というのは、どこか違いがあるのか、その辺りはいかがでしょうか。

**鈴木：**おそらく基本的には同じなのだろうと思います。毎日の生活の中で生きている環境に自分がどれだけ関わってその環境の質を上げられるかという問題と、教育現場という環境をどうしていくかということは、基本は同じだと思います。学校教育の現場におられる先生方にいつも申し上げるのは、例えば同僚で今年入った新入りの先生がいたら、10年後にどんな風にこの先生が活躍して豊かな教師になっているかがイメージできますか？そういう目で教師相互に見守り支援する態勢が現場にはできていますかということです。生徒の行動や振る舞いの奥に、生徒が置かれているどんな状況が潜んでいるのか、発達過程や家庭環境など様々な背景まで総合的に見る必要があるとなってきます。

例えば、「大丈夫？」とたずねて相手から「大丈夫です」という答えが返ってきたとしても、その言葉の表面だけで相手を理解していたのでは不十分です。そうした言葉の奥を読む訓練は工夫次第で、毎日の日常のなかでできるはずですし、家族間の関係の中でもできることです。と同時に、相手の思いをくみ取る訓練だけでなく、相手の未来に思いを託し、相手の将来を思い描けるかということが、特に教育者には求められる力ではないかと考えております。

**一色：**ありがとうございます。野中先生、なにかコメントはございますか。

**野中：**環境について言いますと知覚などの心理学では、空間の知覚、空間の認知の話が昔からあって。でも、私たちは空間に生きていないですよ。わたしたちのまわりにあるのは三次元空間のような容れ物としての空間ではなくて、そこにはお母さんがいて、お父さんがいてという、場の構造が具体的にある環境なわけです。そこにはいろいろな構造と意味があって、私がここからここに移動をするということは、地点 A から地点 B に移動をするという位置変化ではなくて、誰かに近づくことであったりするわけです。そういった意味で、構造のない「空間」と対比して、環境という言葉は私を使っています。

**鈴木：**今の野中先生のお話と関係してくるのですが、私たちは時間というものを単位化した形で理解する習慣になっています。学校における時間も、時間割の発想で捉えています。これは近代的な時間感覚つまり、空間化できる形で時間を計る考え方です。時間割というのは時間を空間化したものですし、保険の計算も人生 80 年を基準にして、自分が何年生きるのかというのを、時間を空間化することで設計しているわけです。そこでは時間の濃密さは関係してきません。物事に集中して過ごす時間の長さが短く感じられるといった何か違うもう一つの時間、生きものの時間のようなものが、環境というものを考える際の時空間としていま一度見直されていく必要があるのではないかと考えています。

**一色：**では、コメント、質問などありますでしょうか。

**梅崎：**総合子ども学科の教員の梅崎です。今日はお二人の先生のお話、ありがとうございました。養成校の教員としていろいろお聞きしたいことがあり、お尋ねいたします。

養成校がどういう環境であればいいのかということについて、ご示唆をいただければと思います。これから動物遺伝学の先生と一緒に麻薬を捜査する犬の養成、どんなトレーニングをすると優秀な麻薬犬になるのか、研究しようと思っています。面白いのは、学校を優秀な成績で卒業した犬が現場で活躍できないという現状です。死体がごろごろと転がった悪党の巣窟で怖くなってしまって、捜査ができない。この話を聞いて、何か似ているなと思うことがありました。非常に熱心に学ぶ学生が多いのですが、よし、現場に出て頑張っていけるのか、自分らしく保育をしていけるのかというと、中々難しかったりもする。鈴木先生のお話の中での示唆では、学生自体の意識の変化も重要だろうということもあったかと思っています。環境を構成している一員としての意識を学生が持てるような働きかけをこちらからしていくことも含めまして、現場と学校のギャップをどう超えていけばいいのか、ご示唆をいただけますでしょうか。

**鈴木：**中々難しい部分も含んだご質問をいただきました。空港などで麻薬探査のわんちゃんがおいをかぐ、そう探査のために近づいてくると、怖くて私はいつもときどきしているのですが。

理論と実践の間をどう繋ぐのかというのは、とても難しい部分だと思います。理論といってしまうと、書物の中にあるものという発想になりがちだと思いますが、私自身が考えている理論というのは、物の

見方、考え方、状況の把握の仕方にまで血肉化されて働くものというイメージです。マップというか羅針盤のようなものとしてその人間に備わるまで内面化されたものです。そこには、マップそのものを制作する力も含まれています。本を読んだり現場を見たりと勉強していく中で、「こういうことになっているのだ」と状況を読み取る時に一つのマップのようなものが人間の頭の中に出来上がっています。その頭の中のマップは、経験を重ねるたびに書き換えられていきます。違う見方があることに気づいたらマップも改変していきます。

先ほど、言葉が固まっている人は頭も固まっていて、頭が固まっている人は行動自体もパターン化しがちであると言いましたが、本当に気を付けていないとこのマップも固まりやすいものです。ですから、それをどうやって常に柔軟な状態を保つかということが重要になってきます。固まってしまった人はどうなるかという、例えば教員養成との関連でいうと、大学のカリキュラムは、ある程度こなし、与えられた課題にこたえることはできたとしてもそうではない突発的な事態が日常の学校生活や教育現場で生じた場合には、うまく対応できないということになります。麻薬犬が実際に捜査する現場は、まさに日常的な様々なことが起こりうるという意味で、ある種、野生の場です。そういう野生の場で働く力を養うことが本当は必要なのでしょう。プログラムをこなしていくことがいくら上手になっても、実際の場面で、野生の知恵というか、型にはめるだけで解決できない局面に対応する知恵がないと犬も人間もダメだと思います。日常実践のなかで働くタクトがまずあって、それは勘に近い部分もありますが、それをいわばわざとして練り上げていくために、自分なりのマップを手がかりに毎日鍛え上げていくという作業がそこで必要になるのだと思います。

一色：ありがとうございました。時間が参りましたので、ここで第一部を終了いたしました。

## < 第二部 >

一色：それでは第二部を始めます。ここからはフリーのディスカッションという形で進めて参ります。では、コメント、ご質問などございますでしょうか。

一般A：今日は優雅なお話を伺いました。どうもありがとうございました。日頃、私が疑問に思っている点を鈴木先生にお教えいただきたいと思います。教育詩学というのは、魅力的な言葉であると新鮮に受け取らせていただきました。その最初のレジユメの中の認知能力ということ、例えば直感、感情、身体知、経験知などの働きとありますが、その中で私が日頃、関心を持っているのは、身体知ということです。それに関連してここから先生に教えていただきたいのですが、最近スマートフォンが流行っているのですが、私はアナログ族なので使いません。しかし殆どの人がありとあらゆる時間の中で濃淡なしに使っているのをみて非常に疑問に思っています。目の前の25センチから30センチの視角の世界。それと私たちの身体知、身体でものを感覚するその辺りの関係がこのままいきますと、どうなるのかといつも疑問に思います。その辺り、先生のご指

導をいただきたいと思います。

**鈴木：**ご質問ありがとうございます。おっしゃっていただいた通り、スマートフォンの問題はこれからとても大きな問題になっていくのではないかと考えています。特に危険認知の能力など、ひと昔前でしたら、武道の達人などはずっと気配を感じるとか、あるいは達人とまではいかなくても私たちは、普段からある種の気配を感じる能力を活用してきました。しかし、スマートフォンの中のバーチャルな世界に浸るなかで、こうした能力はご指摘の通り、失われていくのではないかと考えています。私たちは便利なものに会った時に、そちらのものを活用する能力を発達させると同時に、何かそれまで備えていた能力を失っているのだと思います。そのようにして失っていくもの、失いつつあるものが与える影響について、もっと声を大にして論じ合うべきだと思っています。

それと、今日最初に触れました教育詩学との関連で申しますと、先ほど「頭が固まっていると言葉も固まってしまう」と申し上げましたけれども、頭を柔らかさ、つまり多角的に物を見る目は、言葉遣いの柔らかさや言葉の工夫から見て取ることができます。例えば、夜空に浮かぶ月を見て、「きれい」とか「美しい」と言うことは簡単なのですが、敢えて、そうした形容詞を使わずに、その美しさを表現するには、言葉の彩と申しましょうか、表現の妙を心得ている必要があります。詩など言語芸術を支えている知恵がこれにあたります。このいわば「ポエジーの力」、言葉の工夫をする力は、豊かな表現でものを伝える能力としてだけでなく、物事を多角的に見る能力、さらに発想転換の能力にもなっているかと思っています。そういった、発想転換の能力はまさにご指摘いただきました、スマートフォンの活用の中で失われていくような能力、さまざまな能力を総合的に働かせる力かと思っています。

**一色：**では、他の方で質問などございますか。

**一般 B：**鈴木先生に伺いたいのですが、今のお話のように教育詩学というご案内の葉書をいただいた時に、教育に詩学が出てきて、ずいぶんと教育学も進んでいるのだな、発展しているのだなと感じました。教育学の発展の一つの分野として、教育詩学というのが出てきたのかと思いました。このような教育詩学という言葉を作られたのは、先生が初めてでいらっしゃいますか。もし、今後、教育詩学という言葉が発展していくと、どのようなことになっていくのか、その辺りを感じていらっしゃったら教えていただけますでしょうか。

**鈴木：**本質を突いたご質問をいただきました。ご指摘の通り、「教育詩学」という領域、教育詩学という名称は私が提唱しました。1999年頃から、京都大学で臨床教育学がご専門の皇紀夫先生とご一緒に共同で、言葉の生み出す力について研究するなかで、構想したものです。言葉の彩（あや）を扱う古代ギリシア以来のレトリックとか修辞学の手法を教育研究の分野で用いてみようという試みです。「教育詩学」と銘を打つことで、教育に関心を持っておられる方たちが、普段教育につ

いて語るなかで使っている「言葉の力」というものにもう一度目を向けてもらえたらと思い、「教育詩学」という旗を揚げました。

何かの言葉を活用する能力と言った時に、文法活用能力であったり、辞書にある言葉の意味を理解する能力にばかり目がいますが、詩学は言葉の多義的な働きにむしろ注目します。一つ言葉に対して一つの意味しかないといった、言葉の一義性はものごとを定義づける上で必要ですが、言葉が日常の現実の場面で用いられたい、言語芸術のなかで表現の多彩な手段として用いられるときには、言語の多義性というものが重要になってきます。このような言語の用い方こそが、言語表現を豊かにし、相手に伝わる言葉を生むための原動力になっています。教育現場を活性化していく言葉の力、人を育て人に勇気を与えていくような言葉を語る力が現場から著しく失われつつあるというのが現代の問題ではないかと思っています。力のある言葉が語れない先生が増えている。或いは、自分の状況を言葉にすることがうまくできない人が増えている。その言葉の持つ力を再生させていくにはどうしたらいいのか。そういうことを考えて、教育論議の場での発言を録音し、それをテープにおこして、言語分析をしたりしています。また、玉川学園を創設した小原國芳先生という方は、大正期の教育への機運を高めるために日本全国を行脚された方として有名ですが、教育が世界を作るといふ大正期の一大運動を起こしただけあってその語りには力があります。語りの力だけで、教師も親も、教育で未来が変わりうるといふ勇気をもらったのです。その講演録が残っていて、どのような語り方が伝える力を持ち得たのかなどの研究を、皇先生とご一緒してきました。

言語分析を通して分かったことは、そうした力強い語りにはたくさんの比喩が使われているということです。例えば、幼稚園の入園式で子どもに、小原先生は桜の枝を一振り手にして、次のように話します。桜の枝を指しながら先生は言います。一言一句同じではありませんが、先生は次のように言いました。「君たちはまだこの桜の木でいうと、こんなに小さい枝かもしれない」「しかしこれれから幹がもっと太くなって、そして大きな花を咲かせるまでに君たちは大きくなっていく」「君たちの花が咲くのを私は見たいのです」というように、桜に園児を喩えながら小原先生は語りかけるのです。このような喩えは小さい子どもには分からないのではないかと大人はすぐに思ってしまうがちです。しかし、必ずしもそうではないと思うのです。これからの自分の姿や、学校での未来の日々をイメージする時に、自分が桜の木のように成長していく、そして花を咲かせていくというイメージを子どもは大人と同じように描きながら聞いているのではないかと思うのです。そのようなイメージの喚起の力をうまく活用しながら、力のある言葉を作り、思いを伝えるわざが小原先生の講演録から見えてきます。語りに込められた力というのをもう一度教育の現場で取り戻したいと思って、研究をしています。

先ほども「思いが人を作る」という話をさせていただきましたが、語りを通して思いが人を作っていくことに注目しています。技の修練の現場についても、師匠が弟子に身体でやって見せるだけではなくて、どういう言葉で伝えているかという分析もしています。例えば、近代日本の美術の基礎を作ったといわれる岡倉天心は、自分の弟子に絵の指導をする時に語った言葉として伝えられている次のような逸話があります。弁財天の姿をモチーフに絵を描いていた弟子に向かって岡倉天心は、「弁財天様が奏でる琴の音が君の絵からはまだ聞こえてこない」と言ったそうです。絵から音が聞こえるはずはな

いのですが、その音がまるで響き渡るほどの世界を作るに至ってはいないということをいっているのでしょう。一々細かく指示しなくとも、弟子はそこから師匠の言わんとしたことを読み取り、絵に何が欠けているか自分で悩みまた試行錯誤し、ついにはその絵を完成させたという話です。比喩的な表現を用いることで、伝えたいことのエッセンスや深みを伝えることができるよい例だと思います。学校の日常の中でもそういった言葉をどンドンと採集して、教育現場にもう少し元気を与えるような言葉の世界を再生していくところまで繋げていければと思っています。教育詩学、ポエジーの学というのは確かに大胆な試みではありますが、今日は暖かいお言葉を頂戴しましたので、もう少し頑張ろうと思っています。ありがとうございました。

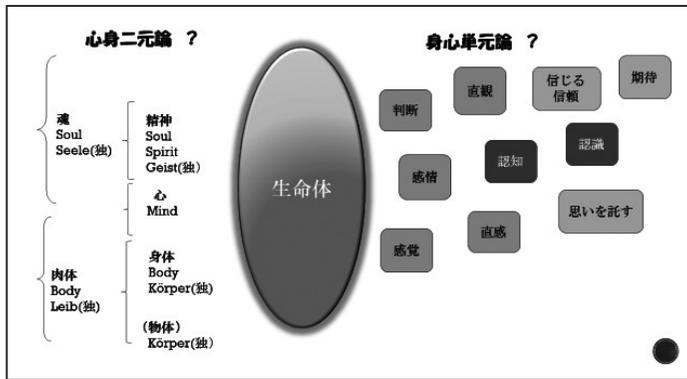
**一色：**詩学のことで、教育というのが入っていない詩学というのは、アリストテレスの時からあります。先生は教育哲学ですが、その辺りからいろいろなことを考えて今、教育ということも入れて教育詩学を作られたのかと思っておりました。

**鈴木：**詩学はご指摘の通りアリストテレスに由来するポイエシス、ものを作る、産む、産み出すというところからきています。アリストテレスの詩学は主に言語学や文学の領域の話として理解されてきました。しかし、詩学の発想に注目しようという動きが人類学の中から出てきたのです。教育詩学では、特に教育の問題を考えていく際に、詩学の方法を取り入れた日常分析をやっていた人類学の研究から影響を受けたということもあります。古代ギリシアの詩学というポイエシスの学が、近代批判ないし近代再考という流れのなかで、思考や行動と言語の関係を見直そうとする人類学によって復権されたのです。教育学の分野でも、このような発想法を取り入れてみようと思いました。そして、言葉を創る、世界を創る、そして人間を創造していく学問という意味を込めて、教育詩学と名づけました。

**一色：**では、他の方でどなたかいらっしゃいますか。

**一般 C：**3のところのパネル、子どもをどう捉えるかという時に、人間はどうかとか透けて見える向こうに何かがあるというお話がありました。心身二言論、心身単元論のところをもう少しお話いただきたいのです。他に感覚の教育を大事にすることなのかと思いつながら聞いていたのですが、感覚にもいろいろとあるのですが、その中で、詩学ということなので、言葉という感覚を組み直していくことで、教育者も子どもも鍛えるというお話でしたが、それと触覚の結びつきが、タクトからきているのかもしれませんが、触覚だけに焦点化されているのはどうしてなのか、小さい時から、もっとたくさんの感覚があって、言語感覚などではなくて、やはり触覚というところに焦点づけられているのはどういうことなのかというところをお願いいたします。

**鈴木：**十分に言葉が足りずご説明できなかった部分ですね。



まずこの心身二元論ですが、身体と精神に分けて考える、魂と肉体に分けて考えるというのは、西洋に発した二元論的なモデルです。まず魂の教育が大事であって、魂の教育をすることで肉体の欲望を抑制できるのではないかといったキリスト教的な世界観もこの西洋の二元論的な発

想に基づいています。これが近代になりますと、人間は精神と身体から成り立つという二元論に吸収されていきます。精神が身体をコントロールすれば、人間はうまく育っていくと考えられたのです。ところがこの二分法で、いけると思ったところが、ちょうど、この精神と身体の間を繋ぐもう一つの領域があるのではないかと問題となってきます。これが心というものです。しかし、心はいわばブラックボックスです。なにしろどこにあるのか分からない。心臓にあるのか頭にあるのか分からない。英語では Mind マインドと心。精神にも肉体にも、どちらにも属さないけれども、どちらとも関係しているこの心というものを研究しようということで 19 世紀に心理学という分野が誕生しました。

私自身は心理学誕生の 18 世紀、哲学的心理学あたりの研究から出発しました。それまで学問の母と呼ばれてきた哲学から心理学という分野が独立しようとしたのが 18 世紀です。精神と身体という二分法では、人間のからだに対して、見方が大きく変化しているのです。近代に入るまでは人間のからだは肉体と呼ばれ、魂の対極にあるものだと考えられてきました。それが、近代に入って、人間のからだは身体と呼ばれることになる。肉体から身体への転換です。英語の Body ボディ、つまり身体は、ドイツ語で Körper ケルパーといいます。ところが、このケルパーは同時に、物理学でいうところの物体のことも指すようになったのです。ここに至って、身体は、「生身のからだ」ではなく、近代科学的分析的によって対象を要素に分解可能であり、また、その要素それぞれの機能や要素間の法則性などをきちんと測定・証明できると考えられてようになりました。「生身のからだ」ではなく、科学の研究対象として研究可能な身体という捉え方です。科学で割り切れるものだけを身体と読んで、逆に割り切れない部分は科学的な研究の対象とならず、いわば「生身のからだ」ないし肉体として十分な研究の対象とならないまま今日に至っているということなのです。近代的な心身二元論は、そもそも人間が考え出した分類法に過ぎません。このような分類法や科学的な見方によって、例えば、直観や直感といった人間の能力はあまり研究されなくなりました。科学的証明が難しいからです。勘や第六感など、目に見えないけれども察知できるような人間の感覚や能力はあまり研究が進んでいません。しかし、研究の対象から外れたそうした能力は人間に備わっているととても大事な能力です。タクトもまたそうした近代に忘れられてしまった能力の一つだといえます。

外界との接触によって、自分の中に生ずる変化を認知する身体感覚も含めた人間の意識作用の一部というように定義づけられているのがタクトです。ですから、ご指摘のように正に、視覚、聴覚、触覚、

いろいろな感覚があって、五感といいます、5つに分けているのも人間です。そのように器官に当てはめて分類できないような感覚のことを、アリストテレスは共通感覚と呼んでいました。タクトの語源は触覚で、それは感覚のうちでも最も根源的な感覚です。その意味でタクトは、アリストテレスの共通感覚に近いものとお考えいただければと思います。

感覚が相互に関係しあいながら働いていることに注目するならば、例えば、言語感覚の中にも触覚は入っているわけです。相手の心をいらいらさせるような、ざらつかせるような言葉の発し方もありますし、相手との関係の中でその言葉を用いることによって、どんな関係性、どんな心のさざなみが生じるかというような、言葉の運用力も言語の力です。そういう意味では、触覚的な言語使用と言い換えてもいいかもしれません。

**一色：**では、他の方でご質問などございますか。

**稲垣：**今日はとてもいいお話をお聞かせいただきありがとうございます。私は、総合子ども学科の発達行動小児科学を専門にしております小児科医の稲垣です。現在は、虐待臨床をしております。

子ども学は甲南女子大学で生まれましたが、「子どもを学び、子どもに学び、子どもと学ぶ」というのがキャッチフレーズになっています。特に虐待する親と虐待される子どもとの関係性の中で、私はいろいろなことを学んできたのですが、この関係性というところで、正に、ものどもの間を繋ぐものとか人と環境を繋ぐものとかそして、人と人、特に人間関係を繋ぐもの、最近ではアタッチメントといって、注目されています。人と環境とを繋ぐ、或いは、生活環境を繋ぐものを子どもたち、或いは私たちがどのように気配を感じてというのが、今日の野中先生のアフォーダンスでとても面白いと思いました。この関係性の発達というものが、初めからあるものかどうかがとても疑問なわけですが、関係性というものがやはりプロセスがあって、発達してくる、変化してくるものだろうという気がするのです。その変化してくるものというものが、一体何なのかということに今日はお話を聞かせていただき、疑問符を感じながら、その部分はもう少し私は、虐待している親と虐待されている子どもの中で、感じられるものがあって、今日は少しヒントをいただいたような気がします。

**野中：**非常に難しいお話ですが、関係性の変化とおっしゃる時に、例えば先ほどの私の話からいうと、環境との関係性の変化について考えますと、変化の資源がやはりあると思うのです。それは、割と人の内側に注目することが多いと思うのですが、周囲との関係を変化していくその周りにはいろいろな可能性が具現していたりする。その中でいろいろな可能性の中から、何か変化の起動が生まれてきたりする。そういう関係性の変化が起こる周りにある豊かな環境みたいなものに注目することによって、今他者も含む環境との関係についてイメージしているのですが、周りにあるものの豊かさを見ることによって、少し変化のプロセスをみる新たな見方が得られるのかなと漠然と考えています。

**鈴木：**虐待のご研究も精力的になさっているということですが、私の研究との関わりでいきますと、例えば虐待という言葉に注目してみたいと思います。実際に問題を抱えている親御さんが使う虐待という言葉と、メディアで一般に報道されている虐待という言葉とでは必ずしも同じ意味あいではないという点が重要だと思います。誰が、何を基準に、虐待と認知あるいは意識するかということ、そうした認知や意識に至るプロセスとに注目した虐待についての語り分析はもっとしていかなければならないと思います。

学習指導案のお話ありがとうございましたので、そこだけ触れさせていただきます。先ほど私は、理論というのは書物の中にあるのではなくて頭の中で常に改変されていくマップのようなものであるとお話いたしました。このマップを作ったのが、ドイツの哲学者であり教育学者のヘルバルト (J.F.Herbert 1776-1841) という人です。このヘルバルトがタクトを教育学において初めて詳しく研究し、また、経験マップの理論を作りました。私はこのヘルバルトの研究から出発しました。ヘルバルトのこのマップについては、日本には明治期に大々的に導入され、5段階教授法として、また学習指導案のモデルとして普及しました。モデルというものは、導入されるとどうしても運用のなかでパターン化してしまう危険を伴います。ヘルバルトの学習指導案も例外ではありませんでした。現在の教案の基本部分はヘルバルトの、つまりドイツ由来のものですが、それが今では日本化されて現在用いられているというわけです。ヘルバルトはこの指導案の作成の中で、明日の授業へのイメージトレーニングとか、授業実習に関わっている教師のマップとして活かす方法まで考えていました。つまり、マニュアル化してしまわない形で、活用していくマッピングの可能性も考えていました。ヘルバルトのこのマップの基礎にある考え方は、現代では、ダイアグラムとの関連でとか情報科学の方で大いに活用されています。そこでも、出来上がったモデルがどうしても先行し、それを使う側はただダウンロードし、それに当てはめていくといったマニュアル化現象が生じているようで、同じような問題が生じてきていると聞いています。常に手作りのマップを作っていくようなトレーニングを、現場で積み上げていくことが必要だと思っています。同じ状況を前にして、そこからどんなキーワードでポイントとなる重要点を要素として引き出してくるかという訓練も含めて、同じクラスの中にキャリアを積んだ先生と若手の先生あるいは実習者が入り、授業の中から何を見たかということの後で記述してみる、或いは、一人の生徒を継続的に見守るなかで、その生徒についての記録を二人の教師がつけていき、それをもとに互いの状況認知の力を鍛錬し合うといった研修の仕方もあるかと思っています。現場の中でその状況を認知する能力とセットにしなが自分なりのマップを開発していくような、そういう可能性はないかと思って研究しています。

**一色：**ありがとうございました。では、他にいらっしゃいますか。

**一般 D：**案内の葉書をいただいて、是非、お話を伺いたいと楽しみに参りました。私は、子どもの自然体験を2,3歳児と一緒に散歩や畑で作業したりという活動を12,3年しています。今日のお話はいつも目の前にいる子どもが、何をしたいのか、何をして遊びたいのかを常に子どもの仕草を見ながら働きかけたいと思っているので、目に見えないものを感じて、子どもが楽しく遊べ

るようにしていくことを大事にしてもいいのだと感ずることができました。私も4人の子どもを育てる中で、毎日子どもの表情から何を感じて暮らしているのかを常に想像しながら子育てしていたので、これからもそのように子どもたちを通して、未来をイメージしていくことが大事であるということをお授けいただきましたので、勇気付けられました。目に見えないものを感じること、その感じや思いを大切にまたそれを伝える、コミュニケーションする。そして相手の気持ちを受けとめてあげていけば、きっといいのだろうと嬉しく感じました。

**鈴木：**ありがとうございます。人の母になるということは、一人の子どもと徹底的に向き合う機会を与えられたということだと思います。一人の人間が変わっていくさまを身近で見守るというすばらしい時間をいただいているわけです。子どもの達人になる権利をもらったわけで、それはすばらしいチャンスだとみることできます。人間をじっくりと観察し、見守る、そして関わることができるという、人生の課題、人生のチャンスだと思うのです。この現代という時代で、人間を見極める目というものがだんだんと失われつつある中で、お子さんと出会いながら、人間にとってもっとも大切な修行ともいべき学びを経験しておられる方々、お父さんやお母さんがもっと誇りが持てる、そういう環境を作っていかなければならないと思います。

**一色：**どうもありがとうございました。今日は、とてもすばらしい講演会になりました。安倍政権になってから、教育再生実行会議で、小中一貫校の制度化なども進み始めている中で、お二人の先生から伺った部分からすると、教育を生み出すものとは何かというものをもっと具体的にしっかりと位置づけして、次の未来の子どもたちを育てていければと感じました。

今日はどうもありがとうございました。